

冬の学校林観察

せたな町立若松小学校

教頭 佐々木 朗

1. はじめに

本校には、学校のグラウンドのすぐ裏に、1ヘクタール弱の学校林がある。今から40年ほど前に植林され、20年ほど前に一度手入れがされているが、後は手つかずの状態である。散策道の跡もあるが、雑草が伸び、散策するイメージはない。また、時折、この近隣で熊情報が流れるなど、いつも見ている学校林ではあるが、なかなか近づけるものではなかった。

夏頃に檜山支庁の協力により、河川にどんぐりを植える事業に参加することになり、そのことが縁で、冬に雪山の観察を行うことに話が進んだ。

2. かんじきをつけて

若松は、せたな町の内陸部に位置し、町内でも豪雪地帯でよく知られている。グラウンドも1メートル以上の積雪になる。余談ではあるが、私が赴任した一年目に雪の量に驚いて、手では手に負えないとボーナスをはたいて除雪機を購入した位のすごさである。



2月の天候が穏やかな日、全校児童は十名ちょっとであるが、一年生から六年生まで全員が玄関に集合し、かんじきを足につけた。大人も初めてであったから、もちろん子どもたちにとっても初めての経験である。指導員を先頭に、一列で裏山に向かった。かんじきをつけると、グラウンドの新雪もズボズボと埋まることなく快適な気分になる。

3. 裏山には小動物の足跡が



裏山を登っていくと、トドマツ林になる。樹齢40近くになるが、多くの木は、両手の親指と人差し指で一周する位の太さ。手入れをしないで、木が混んだまま植えてあるので、太くなれないようだ。細くても、太陽を求めるのか、背だけは、二十メートル以上ありそうで、ぐっと見上げると上の方は葉が茂り、青空が時折覗く。

雪はグラウンドに比べて、少ない。さらに登っていくと「足跡見つけた。」と子どもたちの声。うさぎであろうか。指導者のお兄さ

んが教えてくれる。ノウサギは、冬になると毛も白くなるそうだ。もちろん敵に見つかりにくい保護色と言うことであろう。

頂上近くまでいくと、見下ろすように木々の間から校舎が垣間見える。見晴らしが良いとは言えないが、気持ちのいいものである。ここで小休止。指導員から、野ウサギをはじめ、キツネ、タヌキ、シカ、リス、テンなどの動物の足跡やその行動について、レクチャーを受けた。エゾリスは秋に木の実を隠し、冬になって雪に覆われていても、そのありかを探し出すそうだ。でも、いくつかは隠し場所を忘れてしまい、それが春になって芽を出すという話を聞いた。テンは、木登りが得意で木の上にいる動物たちをえさにすることがある。木の近くで足跡がなくなっている時は木に登った可能性が高い。足跡は、新雪が降るとすぐ消えてしまうことから、足跡があるということは、つい最近に動物たちが通ったと言うことを証明している。



4. 冬山でかくれんぼ

さて、山を少しずつ降りながら途中で、かくれんぼを行った。3人ほどの鬼を残し

て、子どもたちは、白いシーツをもらって、あちらこちらに隠れた。白いシーツをかぶるとかなり見えにくくなる。木の陰にいて最後まで見つからなかった子どもに、みんなで、「よく隠れましたで賞」で拍手を送った。子どもたちはキャッキヤと喜びながら、雪山で自分の身を守るための工夫を学ぶことができた。



5. まとめ

普段全く足を踏み入れることのなかった学校林ではあるが、散策を通して、子どもたちも、教職員も今までと違って身近なものになった。

そして、学校林は、森の動物たちにとっても生活の場であり、また、常に敵の襲来を警戒しながらの戦場でもあることも学んだ。

「身近な教材を授業に」ということはいつも意識していることであるが、なかなかそれができず、写真やネットの写真で代替してしまうことがある。今回の冬山観察で、改めて身近なところに教材があること、そして、「見る目」を持つことによって、ただの冬山が子どもたちにとって多くのことを学ぶ場であることを学んだ。